

第8章 剰余価値の生産

司会：前回7章では「労働と労働力の違い」「労働力の価値とは何か」を学びました。今回の8章では「剰余価値はどのようにして生まれるか」を学習します。レポーターは引き続き徳島県協三好市職友の会の安藤悠輔さんです。よろしくお願いします。

労働力の価値と剰余価値

まず例として以下のとおりの前提条件とします。

- ① ある紡績工の「日々の必需品の平均量（つまり労働力の価値）」は3シリングとする。
- ② その必需品の価値の生産に「平均労働で6時間を要する」とする。
- ③ 1日6時間3シリングで働いたなら、綿花に3シリングの価値を付与する。

そこでマルクスは難点にぶつかるとして、資本家は、商品を買いてその価値を支払うことで、買った商品の消費・

使用の権利を得ています。例えば機械は運転されて、消費され使用、同様に労働力は労働者が働かされて、消費され使用されます。だから労働力の1日分・1週間分の価値を払い、その期間に労働力を使用する（働かせる）権利を資本家は得たことになるのです。

しかし、重要で決定的な一点があるとして、「労働力の1日分・1週分の価値（馬が要する食糧）」と「労働力の1日分・1週分の行使（馬が騎馬者に乗せうる時間）」の両者は別物であるということ述べています。つまり、紡績工は1日6時間働いて3シリン

◆ みんなの学習講座

ングの価値を再生産するが、彼が1日に10〜12時間（またはそれ以上）働くことを不可能にするものではないのです。資本家は彼の労働力の1日分の価値（＝3シリング）を払い、まる1日分の労働力を使用する（働かせる）権利を得ているのです。

そこで例えば資本家は彼を12時間働かせるとすれば、彼の労働力の価値（＝6時間）を超えてさらに6時間働かせます。その超えた労働を「剰余労働時間」とマルクスは名付けました。

つまり、資本家は1日3シリング支払って労働者を彼の労働力の価値以上（2倍）に働かせ、6シリングを得ることができなのです。そのうち3シリングは賃金に充てられたとしても、残りの3シリングは全て資本家のものになります。労働の搾取というのです。（図1）この価値が「剰余価値」であり、これが繰り返されるのです。マルクスは「資本と労働との間のこの種の

(図1)

労働者（紡績工）側

1日 3シリングで 6時間 働く → 綿花に 3シリング の価値を付与
 1日 3シリングで 12時間 働く → 綿花に 6シリング の価値を付与

資本家側

1日 3シリング を支払って → 1日 6シリング の価値を実現
 （6時間分の労働の価値） （12時間分の労働の価値）



日々3シリングを払い、6シリングの価値を実現 を繰り返す

その半分（6の半分の3）は賃金として出てゆく
 残り半分の3は何らの対価も支払わない剰余価値となる

交換こそは、資本制的生産または賃金制度の基礎」であり「労働者としての労働者、および資本家としての資本家の再生産をひきつづき生ぜざるをえないものである。」と定義しています。

剰余価値率

マルクスは、剰余価値率（式1）は、他のすべての事情が同じままならば、労働日のうち「労働力の価値を生産するに必要な部分」と「資本家のために遂行される剰余時間または剰余労働」とのあいだの比率に依存するとしています。そのため、労働者がそれだけ働

(式1)

$$\text{剰余価値率} = \frac{\text{剰余労働時間}}{\text{必要労働時間}} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{可変資本}} = \frac{m}{V}$$

いたのでは彼の労働力の価値の再生産（または彼の賃銀を補填する）にすぎないような、そうした程度以上に労働日が延長される比率に依存するとししました。

剰余労働時間と剰余価値

司会：図にすれば理解が深まりますね。レポーターの安藤さん、ありがとうございます。ございました。

HG：8章のポイントは7章で学んだ、労働と労働力の違いを深く説明した点ではないでしょうか。資本家は「あなたの労働の1日分の価値は3シリングですよ」と賃金を支払います。これだけ見れば何の不满も不都合なこともなく終わってしまいますよね。

IU：実際は1日といっても6時間の労働で労働者の生活を満たす価値は生産できてしまいます。しかし資本家は6時間だけ働かせたのでは3シリング

の賃金を払って相殺されてしまうだけなので旨みがありません。その事実を隠して、ここでは1日12時間働かせることによってさらに3シリングの剰余労働をさせて、剰余価値を得ているということですよ。

NY：なるほど。この場合は6時間以上働かせることによって、剰余価値が生まれるということなんですね。

柳本：労働力の価値というのは、労働者が、その社会で一定の生活をしていける生活手段の価値でまわるわけです。須藤：この例で言えば労働者の生活を満たすことができる価値は3シリング。そしてその3シリングの価値を作り出すのに要した労働時間は6時間です。この6時間は必要労働時間と言います。しかし実際には資本家は12時間労働者を働かせます。この追加された6時間は必要労働の価値を超えた時間であり、剰余労働時間と言います。ここで得られた価値を剰余価値と言います。

◆ みんなの学習講座

●搾取を強化する方法(剰余価値を増やすために資本家が行うこと)



●絶対的剰余価値の生産(労働時間の延長)



●相対的剰余価値の生産(労働の生産力の増大)必要労働時間の短縮



●相対的剰余価値の生産(労働の強度の増大)個別・特殊な一方法



●特別剰余価値の生産(社会的価値と個別的価値との差額)

機械化等で商品を他よりも安く作って売り抜くことで得られる一時的な剰余価値

絶対的剰余価値と相対的剰余価値

柳本…ここでは12時間という例ですが、資本家はより多くの剰余価値を得るためにできる限りこの剰余労働時間を延ばそうとします。この単純に労働時間を延ばすことで剰余価値そのものが増えることを絶対的剰余価値と言います。労働者に長時間労働をさせる。一番簡単なやり方です。

OC…以前ワタミの社長が従業員に「24時間365日、死ぬまで働け」と言っていましたよね。

司会…それでは、この12時間という労働時間が固定されていて、物理的にそれ以上には増やせないとするなら、次はどこで資本家は儲けを増やそうとするのでしょうか。レポーターどうでしょうか。

安藤…6時間であった必要労働時間を短くすることではないでしょうか。6時間だった必要労働時間を5時間にす



長時間労働を強要される居酒屋労働者

須藤…生産力が発展し、大量生産できるようになると物の価値が下がり、おのずと必需品に必要な価値も下がります。労働力の価値も下がります。生産力を上げて必要労働時間を減らすことができるとはいいです。これは直接的に剰余価値が増えたのではなく、賃金分が下がったことで結果的に増えることを相対的剰余価値と言います。

TG…生産力を上げるには機械化するか、郵政で行われたトヨタ方式のように徹底的に無駄な時間を省く労働強化を行うかです。先進的にこれを行うことによって他の企業よりも安く生産し売り抜ける。この一時的な儲けを特別剰余価値と言います。

もしくはもつと単純に賃下げを行うことも剰余価値を増やすことにつながります。

れば、剰余労働時間が6時間から7時間に増えるため、儲けを増やすことができます。



道路工事（旗振りの警備員）

社会を支えているの は労働者

HS…剰余価値の生産については、自治体職場ではイメージしづらいですよ。

須藤…自治体の場合は国家権力の一部であり、この社会を維持するために必要な機関ということです。

柳本…もつと簡単に説明すれば、道路工事をする場合に旗振りの警備員がいますよね。彼は直接道路工事に携わらず、道路をつくりませんが、工事をスムーズにすすめるために必要な労働者であるということです。つまりはそういった労働者も含めて社会的な生産が行われているのです。

司会…この8章では、どの

ようにして剰余価値が生産されるのか、それは誰が生み出すのかをしっかりと押さえておきましょう。これが私たちが学習しているマルクス経済学の非常に重要な部分でもあります。社会を変えるための学習をこれからも深めていきましょう。



学習一生、闘い一生